

# 仕舞と対談「鏡花と能楽～名作『歌行燈』を中心に～」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/28181">http://hdl.handle.net/2297/28181</a>

## 2. 仕舞と対談「鏡花と能楽～名作『歌行燈』を中心に～」

### a. 仕舞「玉の段」

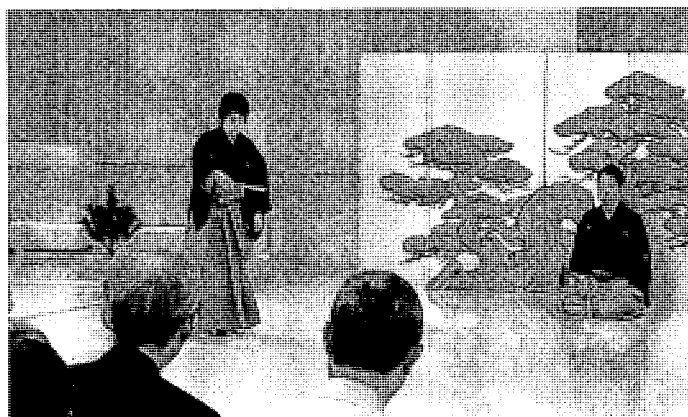
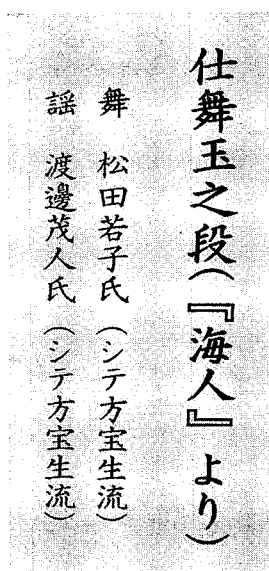
舞 松田若子（宝生流シテ方）

謡 渡邊茂人（宝生流シテ方）

穴倉玉日：ただいまから『歌行燈』成立 100 年を記念しまして、「仕舞と対談『鏡花と能楽』」を始めさせていただきます。まず、仕舞・玉の段を演じていただく前に、『歌行燈』と玉の段について、少々ご紹介いたします。小説『歌行燈』は今から 100 年前の明治 43 年 1 月に発表された鏡花の〈能楽もの〉の代表作です。無芸の芸者・お三重が、流派の重鎮である伯父の怒りに触れて追放された元能楽師・恩地喜多八から神がかりな伝授を受け、能「海人」の玉の段を舞うという物語です。美しくドラマチックな展開ゆえか、たびたび映画化・舞台化され、大変人気を博しました。また、現在開催中の「鏡花と能楽」展でも取り上げておりますように、鏡花自身が非常に能楽師とゆかりの深い生まれであることもあり、早くから作中人物のモデル論などが展開され、研究史上でも大変注目を集めた作品でもあります。

玉の段は能「海人」の一部であり、藤原の淡海との間に生まれたわが子・藤原房前を世継ぎにする条件として提示された宝珠、以前に竜宮に奪われてしまったこの宝珠を奪還するために命をかけて海に潜り、絶命した海人の物語です。中でも玉の段は海人が竜宮で宝珠を取り戻したあと、追っ手を振り切るために、自分の乳の下をかき切って、そこへ玉を隠して海上に戻るといふ、非常に壮絶な場面を描いたもので、独立した仕舞として上演されることも多い作品です。『歌行燈』ではこの玉の段を芸者のお三重が舞うわけです。

本日は近年、気鋭の能楽師として県内外で御活躍中でいらっしゃいますシテ方宝生流能楽師・松田若子先生と渡邊茂人先生に、仕舞・玉の段を演じていただきます。





非常に鮮明に見えたり、聞こえたりしたような、そういう印象が私にはありました。そしてまた、一つ一つの具体的な言葉に応じた所作というのが、今、おっしゃっていただいたように、たくさん演じ所というか、見せ所がある曲のようですね。謡っておられた渡邊先生の方はいかがでしょうか。

**渡邊茂人：**本来、能の型は、よけいな動きを省いて省いて、抽象的になっています。そういう動きに合わせて、謡でふくらませる。風景なり、その動きの意味をつけていく、という構成が多いのですが、玉の段の場合は、ほとんど所作が意味を表していますので、仕舞の地を謡うのがやりにくいですね。また、お能や舞囃子になりますと、お囃子が入りますし、また能の場合は前後があります。流れというものがあるので、その流れに乗って謡うことが、ある程度できますので、やりやすい。仕舞の地謡というのは、謡の中では一番むずかしいと思います。謡の節には弱吟・強吟と二種類ありまして、弱吟と言いますのは音階を作って、旋律を作って謡う。強吟というのは基本的に一本調子で言葉を聞かせるような謡ですが、それが玉の段では途中でころころ入れ替わります。それとまた特別に強吟、この曲だけに限りまして、カングリという非常にむずかしい節扱いが出てきます。そういうところも、さきほどはどきどきしながら謡っておりました。

**西村：**舞われる方も、謡われる方も、非常にむずかしい曲だということになりますね。それで拝見しておりましたと思いますが、『歌行燈』の中でお三重という人がお座敷で、これは一人で謡を謡い、舞を舞うという設定だと思いますけれども、とても大変なことですね。

**渡邊：**大変だと思います。

**西村：**さきほどの御紹介にもありました無芸のお三重が、今お話しいただいたむずかしい玉の段を、たった数日の特訓で身につけて見事に舞えるようになった、ということがこの後の対談でも問題になってきますが、そのむずかしさということを、今実演していただいたお二人から教えていただきました。皆様の方でも、この後の対談とつなげてお聞きいただければと思います。

**穴倉：**松田先生、渡邊先生、西村先生、どうもありがとうございました。皆様、もう一度大きな拍手でお送りください。

